

2020年11月22日  
都城城南教会主日礼拝  
(九州連長講壇交換)  
牧師 乾元美

詩編 143 : 1~2

ガラテヤの信徒への手紙 2 : 15~21

「キリストがわたしの内に」

<信仰義認>

今日は、九州連合長老会の講壇交換です。例年は、10月の最後の主日に、宗教改革記念日を覚えて講壇交換が行われます。今年は、さまざまな事情で時期はずれてしまいましたが、それでも、このように教会同士の交わりを持つことが許されて、心から感謝しています。

さて、今回もやはり、聖書箇所は宗教改革に関連する箇所が選ばれました。ガラテヤの信徒への手紙です。

宗教改革において最も大切なことの一つに、「信仰義認」、「ただ信仰によってのみ義とされる」ということがあります。まさに、今日の聖書箇所の小見出しには「すべての人は信仰によって義とされる」と書いてあります。「すべての人は信仰によって義とされる」。

「義」というのは、神さまの正しさのことです。すべての人は、信仰によって、神さまに「あなたは正しい」、「あなたは罪がない」と認めてもらうことが出来る。それが、信仰義認ということなのです。

16節にはこのように語られています。「けれども、人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義としていただくためでした。なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです。」

<信仰によって>

さて、宗教改革の立役者であるマルティン・ルターは、この「信仰によってのみ」ということを大きな声で主張しました。

なぜなら、当時の教会では、救われるため、つまり「義」、正しいと神さまに認めていただくためには、イエスさまを信じる「信仰」と、わたしたちの「善い行い」が必要だと考えられていたからです。

ルターは修道士でしたので、とにかく救われたい一心で、人一倍必死になって厳しい修行をしたようです。戒律をよく守り、よく祈り、よく懺悔し、善い行いを積み重ねました。

でも、どれだけ努力しても、ルターは救いの確信を得ることが出来なかったのです。

それどころか、まったく平安が得られない。神さまはわたしの罪をご覧になって、ずっと

激しく怒っておられる。どれだけ頑張っても、罪を赦されるためには全然足りない。どうやっても神さまの赦しを見出すことが出来ない。自分は裁かれ、滅ぼされるに違いない。

そんな風に、ルターは神さまの怒りと裁きを恐れ、日々を怯えながら過ごしていました。

しかし、ルターは聖書の研究を重ねていく中で、やがて神さまの御心を知ったのです。

聖書にはどこにも「善い行いが必要」などと書かれていない。むしろ、ただ信仰によって救われる。ただイエス・キリストへの信仰によってのみ、義とされる。自分の行いは一切無力で、自分の力で救いを獲得したり、罪の贖いを自分で成し遂げたりは出来ない。けれども、イエスさまの十字架が、わたしのすべての罪を完全に贖って下さる。イエスさまにだけ、わたしを救うことが出来る。ただ、このイエスさまの十字架によってのみ、このイエスさまに頼ることによってのみ、自分の罪は赦される。義とされる。自分は罪人でありながら、しかしイエスさまによって、「あなたは正しい者だ」と神さまに宣言していただくことが出来る。聖書はそう語っていることを知ったのです。

これは、ルターが発見したことではありません。ルターは、初めから聖書に書かれていたこの福音を、改めて見出したのです。そして当時、「信仰と共に、人の善い行いも必要だ」と教えていた教会の過ちを正そうとしたのです。

「信仰によって義とされる」とは、ただ十字架によって罪を贖って下さったイエスさまに依り頼むことによって救われる、ということです。信仰とは、イエスさまを信頼し、その救いを確信する、ということです。

今日の聖書の16節の「イエス・キリストへの信仰によって義とされる」というのは、「イエス・キリストの真実によって義とされる」と訳すことも出来ます。また、「キリストの信頼性によって義とされる」と訳す人もいます。「信仰」というのは、イエスさまの「真実」であり、イエスさまの「信頼性」によって、与えられるものなのです。

### <イエスさまの真実>

ですから、わたしたちの信仰の確かさは、イエスさまにこそあります。イエスさまの真実によって、わたしたちは救われます。イエスさまが信頼できる方だからこそ、わたしたちは依り頼むことが出来ます。それが信仰です。

それなのに、わたしたちは、時々「信仰」を、「自分の信じる力」のことや、「自分が神さまに信頼している度合いの強さ」のように思っていることがあるのではないのでしょうか。

しかし、信仰は、わたしたちの思いの強さや、決意の固さ、熱心さのことではありません。

わたしたちの思いの強さなんかは、何かコトが起こればすぐにはじけ飛びます。熱心さなんかは、いつでも簡単に冷めてしまいます。決意だって、あっという間に揺らぐのです。

聖書は、そんなわたしたちの姿をはっきりと見つめています。

それは、あのイエスさまの一番弟子のペトロでさえそうでした。イエスさまが、御自分が

十字架に架けられる前に、「あなたは三度わたしのことを知らないと言うだろう」と、裏切りの予告をされた時、ペトロは何と言ったのでしょうか。彼は力を込めて言い張ったのです。「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」そしてペトロは、その言葉を語ったのと同じ口で、その後、イエスさまのことを三度「知らない」と言いました。

神さまはご存知なのです。わたしたちの罪深さを。弱さを。頼りなさを。愚かさを。

ペトロだって、この時は本気で、イエスさまに死んでも付いて行くつもりだったでしょう。それが嘘だったわけではないと思います。でも、そうすることが出来ない。自分の力では、自分の決意では、自分の努力では、イエスさまに従い抜くことが出来ない。神さまに向かうことが出来ない。それがわたしたちの現実の罪の姿なのです。

でも、神さまは、それで愛想を尽かされたりしません。見捨てられたりはしません。むしろ、そんなわたしたちを深く憐れんで下さいました。それでも愛して下さいました。だから、なんとか救い出そうと、なんとかご自分のもとに立ち帰らせようと、御自分の御子イエスさまを遣わされたのです。

イエスさまは、わたしたちの苦しみ、痛み、罪、滅びを、すべて引き受けて下さいました。そして、神さまの愛を信じる者に、イエスさまの救いに頼る者に、御自分のすべてを与えて下さるのです。わたしたちとご自分を一つに結び合わせて下さり、罪の赦しと、悪への勝利と、永遠の命と、復活の約束を、そして、神の子となる権利を、惜しみなく、むしろ喜んで、与えて下さるのです。

わたしたちは、このイエスさまに縋るしかありません。このイエスさまの十字架による罪の贖いに頼るしかありません。イエスさまは真実な方です。神さまは確かに愛に満ちたお方です。十字架と復活に、その真実が示されたからこそ、このことを知らされたわたしたちは、神さまの愛を確信し、イエスさまに依り頼み、ただ救いを受け取って、神さまの宣言を聞くことが出来るのです。

「キリストの十字架によって、あなたは罪を赦された。あなたを正しい者とする。わたしとの良い関係に生きる者とする。あなたを、神の子として受け入れる。」

ですから、わたしたちの信仰は、神さまからの賜物なのです。

それなのに、わたしたちはすぐこんなことを言うのではないのでしょうか。「わたしは信仰が弱い」「わたしの信仰は大したことがない」「あの人の信仰は立派だ」「あの人の信仰は強くて素晴らしい」。

それだと「信仰」というものが、人によって、あるいは自分の思いや、調子によって、大きくなったり、小さくなったりしてしまうものみたいですね。それに、「信仰」が「信じる」という自分の行いになっていて、その信じる自分の力に救いがかかっているかのようです。

でも、そうではないのです。わたしたちが、どれだけ弱っても、打ちひしがれても、倒れても、つまずいても、神さまの愛は、イエスさまの真実は、決して変わらないのです。

わたしたちは、自分の行いではなく、自分の力ではなく、自分の能力ではなく、ただこの神さまの確かさによって救われるのです。

信仰は、与えられるものであり、依り頼むべき神さまの真実のことです。その信仰によって、救われる。それが、聖書に語られていることなのです。

#### <神の恵みを無にしない>

ですからパウロは、人が救いの条件のようにして「行い」を重んじることを、厳しい言葉で非難しています。それは、救いのために、わずかでも人の行いが必要かのように、何かの足しになるかのように思われるからです。21節にははっきりとこう語られています。

「わたしは、神の恵みを無にはしません。もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。」

「律法のお陰で義とされるとすれば」とありますが、「律法」とは、ユダヤ人たちの先祖であるイスラエルの民に与えられたもので、本来は、選ばれた神の民イスラエルに、神さまの御心を教えるものであり、神さまに従って歩むことが出来るようにと、神さまが与えて下さったものです。

でも、時代が下るにつれて、律法は、救いに与るために、一言一句必ず守られなければならない規則集のようになっていました。それが、律法を持たない異邦人を汚れた者として軽蔑すること、神さまの救いから漏れた者として、罪人と呼んで扱うことになっていきました。

しかし、神さまの御心は、そのように律法を一言一句守っているユダヤ人を救うことではありません。神さまのご計画は、ユダヤ人、つまり選ばれた神の民を用いて、全世界の人々を祝福することでした。造られた世のすべての人を救うことが、神さまの御心です。

だからこそ、神さまは神の民としてユダヤ人たちの先祖イスラエルを選び、この民に、預言によって救いのご計画を示し、この民の中にイエスさまをお遣わしになったのです。そして、イエスさまの救いを、全世界に宣べ伝えさせたのです。

ですからイエスさまは、ユダヤ人にも、異邦人にも、御自分の救いをお与えになります。すべての人に信仰をお与えになります。ユダヤ人でなくても、律法を持っていなくても、割礼という神の民の条件が体に刻まれていなくても、神さまの愛を信じ、イエスさまの罪の贖いに頼るなら、信仰によって、誰でも救われるのです。それが、父なる神さまの御心です。そのために、イエスさまは十字架に架かって死んで下さったのです。

ですから、もし、人が何か少しでも、救いのためにこうしなければならない、というような条件を付けようとするなら、それはイエスさまの死だけでは、救いに不十分だと言っていることになります。

救われるためにユダヤ人のようにしなければならない、と言う者がいるなら。それがここでは「律法の実行」という言葉で表されているのですが、つまり人が何かを行うことによって、救われる者としての条件を満たし、救いに近付けるというなら。その行いがなければ、救いから遠ざかるかのように考えるのなら。それは、わたしたちに無条件で罪の赦しを与えるために、御自分の命を十字架によってささげられたイエスさまの死を、無駄にする。無意味にしてしまう。そこまでパウロは語るのです。

<キリストがわたしの内に>

わたしたちは、自分で自分を救うことは出来ません。神さまに背いた罪、神さまの御声に背き続けた罪は、あまりに大きく、わたしたちは自分の命をもって償いきれないのです。

そういう意味では、ルターが感じていた恐れは本物です。自分の力では、救いに到達できない。神さまの怒りを逃れられない。終わりの日には、罪を裁かれて、滅ぼされるしかない。

しかし、聖書にははっきりと、わたしたちの罪を償うために十字架に架かられたイエスさまが示されていました。

パウロは 19～20 節でこのように言います。「わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。」

イエスさまは、わたしが生きるために、わたしが滅ぼされないために、わたしが神さまの御前で義であると、正しいと言っていたために、わたしの罪を引き受け、苦しみと痛みを引き受け、滅びの死を引き受けて、十字架に架かって下さった。そうして、イエスさまの十字架の死と共に、わたしは律法に対して死んだ。もはや、行いによって支配され、罪に支配され、捕らえられていたわたしは死んだ、というのです。

イエスさまの救いを信じた者は、洗礼を受けます。洗礼とは、聖霊によって十字架と復活のイエスさまに、一つに結ばれることです。信仰を与えられ、救いを確信し、イエスさまに依り頼み、イエスさまと一つにされたわたしたちは、イエスさまの死を、わたしたちの死とされます。罪に対して、わたしは十字架のイエスさまと共に死んだのです。もう、罪に捕らわれていないのです。

そして、生きているのは、もはやわたしではない。キリストがわたしの内に生きておられる。イエスさまと結ばれて、十字架で死んで、復活の命にあずかって、わたしはもはや、罪に捕らわれているわたしではなく、キリストに捕らわれているわたしである。キリストの支配が、わたし心にも、体にも、魂にも、すべてに及んでいる。もはや、わたしはキリストによって生きている。キリストの命に生かされている。

そして、このようにされたのは、「わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する『信仰』によるもの」なのです。神の子の愛と真実によって、今、ここに、肉をも

っているわたしは、神に対して生きる者とされているのです。

だから、わたしたちは、この神の恵みを無にしてはいけないのです。わたしたちは、差し出された恵みを、十字架の死に渡されたイエスさまの命を、ただただ感謝をもって受け取るしかないのです。

時々、洗礼を受けるのに、聖書のことをあまり知らない。敬虔な生活をしていない。清く正しい、立派な人物ではないから、まだ洗礼は受けられない。そういう方が時々おられますが、そんなのは救われるために必要な条件ではありません。

あなたのためにキリストが死んで下さったことを受け入れるかどうか。神さまがあなたを愛して下さったことを信じるかどうか。イエスさまに頼って、あなたのすべてを委ねるかどうか。それが大事なのです。

そして、救われた者が、その恵みに感謝して、喜びに満ちて、「善い行い」をする者とされていくのです。

しかしそれでも、救われてもなお、わたしたちは罪を犯し続ける者です。神さまの恵みを忘れたり、自分の力に依り頼もうとしたり、自分の心の状態に左右されたり、誘惑に負けそうになる者です。わたしたちに、確かさは何一つありません。

しかし、父なる神さまの愛は、真実です。イエスさまの救いは、真実です。この神さまに依り頼むなら、すぎるなら、求めるなら、神さまはいつでも喜んで恵みを与え、御自分のもとに立ち帰らせて下さるのです。

恵みを受け取ることや、神さまにすぎることや、救いを求めることは、わたしたちの功績でも、善い行いでもなんでもありません。目の前に信頼できる方、真実な方、愛して下さる方がおられるから、わたしたちはそこに身を寄せることが出来る、自分を委ねることが出来る、祈ることが出来る、ということです。そして、神さまは、わたしたちがそのようにすることを、心から望んで下さっているのです。

「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。」

わたしたちは皆、この言葉を口にすることが出来ます。わたしは、もはや罪に捕らわれていません。キリストが、わたしを支配しておられるからです。死は、わたしを滅ぼしません。復活の主が、わたしの内におられるからです。

キリストがわたしの内に生きておられる。ここに、救いがあります。

ただ、キリストの愛と真実に依り頼みましょう。

## 【お祈り】

憐れみ深い父なる神さま

罪に捕らわれているわたしたちを憐れんで下さり、愛して下さい、御子イエスさまを遣わして下さいことを感謝いたします。

ただイエスさまの十字架と復活の御業によって、わたしたちは義とされます。わたしたちには、罪を赦していただくために、差し出せるものも、なすことができることも、何もありません。しかしあなたは、わたしたちがあなたの愛を知り、立ち帰るなら。イエスさまの救いを信じて、受け入れるなら。罪を赦して義として下さり、神の子として下さり、新しい命を与えて下さいます。

ただこの恵みを受け取ることによって。ただ信仰によって。わたしたちを救って下さることを感謝いたします。

素直に、あなたに依り頼み、その救いを確信させて下さい。計り知れない愛と恵みを、受け取らせて下さい。そして、共に生きて下さるイエスさまにあって、あなたに喜ばれる者として、あなたに従って歩むことが出来るように、聖霊によって導いて下さい。

都城城南教会の兄弟姉妹と共に、このように御前に出て、御言葉の恵みに与れたことを感謝いたします。4月から新たに遣わされた教師と共に、この群れがただあなたの恵みにのみ依り頼み、喜びを証ししつつ歩む群れとなさせて下さい。宮崎中部教会、また九州連合長老会の諸教会との豊かな交わりを与えて下さり、共に信仰に固く立たされて、共に祈り合って、共に支え合って、この地に福音を告げ知らせていくことが出来ますように。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

## 【祝福】

主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン